

かにそのことのみを指摘した作品論でさえ、影も形もなかったというのは、一体どうしたことだったのか。その辺りに余りにも硬直した封建制理解の存在を考えずにはられないのは、再度、私独りの恣意的な意見とは到底言えない筈であろう。

思うに、こうした硬直した封建制理解というもの、恐らく中世に始まる18・19世紀ヨーロッパ的、或いはロシア・中国的な封建制なるものを、そのままストレートに江戸の封建制そのものと見なした所から出発しているのではなかっただろうか。それがそのまま近代日本における教科書的な封建制理解として浸透した経緯については、この国の近代の成立に即して容易に推測し得る所ではある。それに対して、江戸には江戸モデルの封建制としか言い様のないものが存在したのではないかという事もまた、虚心に江戸文化の様態に思いを到した時、容易に推測し得る筈なのである。

私などがそのような自他の相違に一瞬気づかせられたきっかけは、この所数年にわたって続けている在外和古書調査によって、欧・露・中など諸所の歴訪を重ねた折にあった。こうした場所の大半はかつての封建領主の居宅や迎賓館の類がそれにあてられるのが通例である。例えばエルミターージュ。その二千に余る部屋部屋に、これでもかとばかり集められた財宝の数々。廊下や天井に至る迄徹底して施されたまばゆいばかりの装飾。驚嘆の内にフト気づかされたのが、我が日本近世の封建領主の居宅との、余りの相違懸隔ぶりである。無論その時の国力の差はあるにしても、その徹底した収奪ぶりは、その意志、その姿勢そのものが全く違っている。これが同じ封建制の結果である筈がないではないか。というのが洵に単純素樸な私の感想だった。以来、この想念は脳裡に蟠り続けて、人情本云々の理解も明らかにそこに起因した考えだった。その間、渡辺京二氏の「逝きし世の面影」とい

う好著が刊行されたことも幸いしたし、余りにも有名な新渡戸氏の「武士道」も、こうした観点から読み直すと、新たな示唆に満ちていることに気づいたりして、いわば自分のフィールドである江戸の文物の再確認をする間にも、史学畑の先達は何らかの示唆を求めべく努める内、宮崎市定氏の論述に、既に彼我の封建制の内実に相違があることの指摘が果たされていることにも気づかされた。その内実の相違の詳細は、ここに触れる紙幅はないが、この問題の根底には、結局の所、研究者の姿勢としての近代主義の問題が大きく関わるという結論に到達することになる。但しこれをしも単純な近代主義批判ととられても困るので、要はこれ迄の近代主義の中身の問題と言うべきであろう。これ迄の近代主義は、それ自体きわめて浅薄未熟であったと言えよう。それはとりも直さず近代そのものが猶未熟であったというべきかもしれぬ。成熟した近代、もしくは近代主義による江戸の見方とは何か。それは約言すれば江戸に即して江戸を見る視点の獲得というに尽きよう。その時初めて江戸モデルの封建制の正しい理解も生じるに違いない。今世紀はまさにそうした成熟した近代主義の時代でなければならぬ。ポスト近代の掛け声は、何やら近代は既に終わったかの如くであるが、とてもとても。本当の成熟した近代はこれからだと痛感する。そして今、窓外の油山は暮れなずむ明りの中に山麓の道路工事の喧噪など、どこ吹く風と、黒々と七年前と全く変らぬ山容を見せてくれている。それは又、まさしく福岡大学のこれからのあるべき姿の明示でもあろう。述べきった想念を育ててくれた油山に、また福岡大学には深甚の謝意を申述べばかりである。

正面から取り組むことになった。そして、先ず2成分系について水-炭化水素系（炭化水素はアルカン、アルケン、アルキルベンゼン）の界面張力を水と炭化水素の表面張力から2%の偏差で推算する式を得た^{4),5),6)}。次に、溶質を含む水-炭化水素の3成分系について、界面への溶質の吸着による界面張力低下をバルク相の溶質濃度の関数として表して、6%の偏差で推算する式を得た^{7),8),9)}。これが学位論文となった



著者近影

問 その他の研究面でいうと？

答 箇条書きであげてみよう。

- (1) 福大薬学部との共同研究だが、W教授が実験、私が計算という分担でファージの感染過程を追及した¹⁰⁾。
- (2) W教授および土木工学科のY教授との共同で病院ホルマリン廃液の処理の研究を行った¹¹⁾。
- (3) 九電工との共同研究では排水の好氣的処理を自己造粒粒子の流動化によって行う塔式の装置の開発を手がけた¹²⁾。これは実用化された。
- (4) 博士課程のS君とのコンビで活性汚泥法プロセスのファジィ制御の問題を扱った¹³⁾。
- (5) 最後は埋立地浸出水の処理を蒸発法で行う実験を行った¹⁴⁾。

問 君の専門の化学工学は今後どう発展するのだろうか。

答 化学工学は方法論の学問なんだ。工学の専門は、例えば機械工学が機械、電気工学が電気設備というように考察の対象を限定しているのに対して化学工学は化学装置のみに限定されない。ナノの現象から地球環境まで、種々の問題を解決に導く方法、実際には物質収支、エネルギー収支とその速度、反応平衡と反応速度、システム解析などの手法を具体的な問題に適用してモデル化し解決を計るところが化学工

学の特徴だね。従って、化学工学の対象は解決すべき問題を追及して時代と共に変化する。もっとも大学で教えるカリキュラムは化学工学のコアとなる科目に重点が置かれるがね。

問 君はJABEE（日本技術者教育認定機構）についても熱心だったね。

答 JABEEについては手を抜かずに取り組んだよ。発端は、これが我が学科の地位を高めると思ったからで、やっているうちに高等教育の本質を突くものと気付いた。従来の何を教えたかではなく学生が何の能力をどこまで達成したかが問われる。教育目標をはっきりさせて、そのための教育方法、評価方法を定めて毎年改善をはかりスパイラルアップしていく。焦点は学生の修得能力の向上一点にあるわけさ。認定を得るには、いくつかあるJABEEの基準をクリアする教育システムを構築しなければならない。そのためには学科の教職員全員の意識改革と一般教育、基礎教育を含めた体制作りが必要である。我が学科は化学系では全国でも最も早くこれに取り組み認定を得た。私自身は審査員あるいは審査長として他大学に出向き、顧みて己を正すことを心掛けたよ。

問 34年の経験から研究と学生教育の関連についてどう思うかね。

答 今の学生の多くはゲーム感覚で入学試験や定期試験に臨むらしいね。IT業界のある社長が事業にもそれを持ち込み社会の糾弾を受けてしまった。ところが、卒業論文あるいは修士論文作成のための実験をし、それをまとめる体験をすると、ゲーム感覚で一直線というわけには行かないことに気付くよ。本や文献に出ていることを鵜呑みにしたら痛い目に会うこともあるし、データは再現性を確かめなければ自信を持って物が言えないし、先生も時には間違ったことを言うので自分で確かめなければ無駄をして馬鹿を見るし、枝葉を落して論理の骨格をしっかりとさせねばならないし、などと相当ひねくれた考えをしなければ真実はつかめないことを体験で知るわけさ。指示待ち人間から脱皮し、物事の判断力を身に付けると思うよ。これが研究から得られる教育ではないか。そのためには先生の厳しさと研究室の暖かく活気ある雰囲気が必要だけだね。我々の大学は専門学校やサイバー大学と違ってそういう人間力を養成することが出来ると思うよ。

問 福岡大学を去るに当って君のこれ迄を簡単に紹介したら。

答 私は1959年に九州大学工学部応用化学科を卒業し、直ちにエンジニアリング会社である千代田化工建設(株)に入り、石油精製装置のプロセス設計をやった。思うところあって8年でここを退社し、1967年に九州大学工学部化学機械工学科の助手となった。そこで化学工学の修業を5年行い、1972年に福岡大学工学部化学工学科に助教授として就任したわけさ。1980年に教授に昇格したが、1979年から3期(6年)工学部の教務委員として教務と入試の仕事に当たった。両方こなすのは激務だったよ。1999年から2期(6年)は法人の評議員をした。また、(社)化学工学会の理事を2期(4年)、同会の九州

支部長を1期(2年)やり、2003年同学会の名誉会員に推挙された。定年退職に当り「化学工学一筋50年 古稀を迎えて」と題する記念誌を刊行したが、第一部が福岡大学での34年、第二部が自分史の私家版だよ。それにも書いているが、私の福岡大学での学生教育の根底にあったのはプロセス設計の体験で、質問に訪れた学生とディスカッションをするのは最高の楽しみだったね。

【引用文献】

- 1) 化学工学, **36**, pp 914 916 (1972)
- 2) 化学工学論文集, **1**, pp 549 551 (1975)
- 3) 化学工学論文集, **3**, pp 435 439 (1977)
- 4) 化学工学論文集, **14**, pp 408 412 (1988)
- 5) J.Chem.Eng.Japan, **22**, pp 315 317 (1989)
- 6) J.Chem.Eng.Japan, **23**, pp 94 95 (1990)
- 7) 化学工学論文集, **15**, pp .1026 1030(1989)
- 8) 熱物性, **4**, pp 42 45 (1990)
- 9) 化学工学論文集, **19**, pp 663 668 (1993)
- 10) Agric.Biol.Chem., **44**, pp 869 875 (1980)
- 11) 日本農芸化学会誌, **59**, pp 381 387(1985)
- 12) 化学工学論文集, **18**, pp .139 145 (1992)
- 13) 化学工学論文集, **22**, pp .1 7 (1996)
- 14) 化学工学論文集, **30**, pp 831 834 (2004)

日付で福岡大学助教授に着任しました。前記両教授の執拗な依頼は肉眼解剖学を教育できる人材が極端に払底していたためと推察されます。福岡大学に着任後は教育準備に追われ、とくに解剖体蒐集に多くの時間と精力を費やさざるを得ませんでした。着任後2年間程して漸く時間の余裕が少しはできて、研究に着手しようと考えました。しかし、長崎時代に研究材料とした狭鼻猿が手許にない事で悩みました。研究分野を変える事を一時期考えましたが、これまでに手掛けてきた肉眼解剖学的研究から離れて新に研究分野を開拓する程の勇氣も無く、研究業績が挙がり難い分野であることを充分承知しながらも、ヒトを研究材料として肉眼解剖学的研究を行うことにしました。福岡大学助教授在任中の5年8ヶ月で挙げた研究成果としては、ヒト大胸筋及び小筋胸に由来する破格筋、ヒト棘間筋の標準形態の決定、ヒト頸部に出現する純正棘筋（筆者命名）等を挙げるができます。

昭和53年4月大分医科大学（現大分大学医学部）が新設され、同大学からの招聘を受け、同年同月福岡大学を辞して大分医科大学解剖学講座主任教授に着任しました。福岡大学着任時と同様に大分医科大学でも数年間は教育準備、解剖学講義・解剖実習に忙殺されました。私のように新設医大における教育準備の苦勞を二回も経験した大学人は極く稀ではないでしょうか。

大分医科大学でもヒトを研究材料として、肉眼解剖学的研究を継続しましたが、福岡大学で行った胸部の破格筋の由来についての研究が私の体幹前側部の筋の研究に大きく役立つことになりました。従来、単純な構造物であると見放され、肋間神経の構造については極めて曖昧に記載されていました。肋間神経は皮枝と筋枝から成り立ち、筋枝は外・内及び最内肋間筋を支配するとするのが定説でした。しかし、私は肋間神経を検索して、筋枝を外肋間筋を支配する神経（外肋間筋神経：筆者命名）と内・最内肋

間筋を支配する神経の二枝に区別すべきことを提唱しました。このことは体幹前側部の筋に関する従来の概念を変えざるを得ない結果を生みだしました。これまで体幹前側部の筋については神経と筋との層序関係から、胸部の外肋間筋、内肋間筋及び最内肋間筋はそれぞれ腹部の外腹斜筋、内腹斜筋及び腹横筋に相当すると見做すのが定説でしたが、私の肋間神経の研究結果から、胸部の外肋間筋は腹部には通常は存在せず、稀に外腹斜筋の深部に存在する深外腹斜筋がこれに相当し、胸部の内肋間筋及び最内肋間筋は従来の定説と同様に、それぞれ腹部の内腹斜筋と腹横筋に相当し、腹部の外腹斜筋に相当する筋は胸部では猿類以下の動物では胸筋筋として存在するものの、ヒトには存在しないことが分かりました。

いろいろの事情で、平成3年10月1日付で福岡大学に解剖学教授として着任しました。本学では大腿前面の筋について研究を行い、とくに外閉鎖筋の形態の本質について支配神経の視点から解析しました。その結果、外閉鎖筋が極めて安定性に乏しい筋であり、個体発生の途上で、この筋の一部の筋束が分離することがわかりました。分離した筋束の退化・消失、独立的残存、周囲の他筋への癒着等により大腿内転筋群に多くの変異をもたらすことを解明できました。

以上、44年間の研究生活を顧みて、主な事柄を述べました。労多くして効少なしの研究分野に長年月にわたり携わりましたが、悔いはありません。研究の自由を与えてくれた環境には幾重にも感謝します。